



発行日 2005年5月31日 発行人 福島伸悦

編集責任者 浅井宣亮 編集担当 太田賢孝 編集委員 黒田 菅原 関水 笹 細川

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.28



2005年度総会講演会 集合写真

## CONTENTS

|                                          |                       |    |
|------------------------------------------|-----------------------|----|
| ●巻頭 「人・情報・縁 —運動から行動へ— S Z Iブランドの確立を目指して」 | …………… S Z I会長 福島 伸悦   | 1  |
| ●特集 2005年度 総会講演会抄録                       |                       |    |
| 「情報化社会における宗教意識のハイパー化」(前編)                | …………… 國學院大學教授 井上 順孝   | 2  |
| ●海外レポート 豪州発「オーストラリア禅宗事情」                 | …………… 南米布教部総監 采川 道昭   | 4  |
| 南米発「泰山山慈恩寺と巡回法要に関わって感じるもの」               | …………… フリーライター 太田 宏人   | 6  |
| ハワイ発「モロカイ島カラウパ半島訪問記」(I)                  | …………… S Z I事務局 太田 賢孝  | 8  |
| ●連載 「東漸?西漸?—ヨーロッパの禅—」第1回                 | …………… 山形県 乗慶寺住職 五十嵐卓三 | 10 |
| ●S Z I通信 各総監との懇親会の報告                     | …………… S Z I事務局 館盛 寛行  | 12 |
| 計報                                       | …………… S Z I事務局 大谷 有為  | 12 |
| ●会費納入者・動静報告                              | ……………                 | 13 |
| ●新執行部役員紹介                                | ……………                 | 14 |
| ●両大本山ワークショップ開催案内                         | ……………                 | 16 |

## 巻 頭

## 人・情報・縁 —運動から行動へ—

S Z Iブランドの確立を目指して

S Z I会長 福島 伸悦



初代会長・松永然道老師、第二代会長・藤川享胤老師の後、浅学非才を顧みず、第三代目の会長をお引き受けさせていただきました。

宗門の国際布教は新たな時代に入ったと言ってもいいでしょう。そんな中でSZIの舵取りをしていくわけですが、上記の新たな活動テーマを掲げさせていただき、人・情報・縁を大事に、具体的に行動していきたいと思っております。

日米の企業の資産構成について研究したのによると、知的所有権・研究開発力といったコンセプトをもった「ブランド」こそが超過収益力を生み出す源泉であるといえます。そこで、SZIが進むべきスタンスとしてSZIブランドの確立を目指し、国際布教に関するシンクタンク的な役割を果たしてまいりたいと存じます。

今、世界は、人権・平和・環境・経済・情報という5つのキーワードのなかで動いているといえますが、情報通信の発達により、あらゆる面においてスピードが要求される時代であることは、言うまでもないことです。それには、宗門の中で埋もれている人材を発掘し、国際布教に情熱を持つ僧侶を育成し、宗門に限らず世界の宗教の動向を把握できるように人と情報を駆使して情報収集をしていかなければならないと考えるのです。

基本方針として(1)機動的・効率的な組織作り(2)外部専門家の登用(3)目標設定と評価(4)情報ネットワークの充実(5)スタッフの意欲向上と能力開発の5つを掲げ、曹洞宗の国際布教の一役を担えるように、役員ともども頑張ってまいりたい所存です。何卒宜しくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

## 情報化社会における宗教意識のハイパー化（前編）

國學院大學 神道文化学部 神道文化学科教授 井上 順 孝

ただいまご紹介にあずかりました井上と申します。よろしくお願ひいたします。

この集まりはS O T O禅インターナショナルということで、海外布教をやっている方が多いと以前にお聞きしました。今回は私が今取り組んでいる「情報化社会が宗教にどういう影響を与えるのか」について考えていることをお話ししたいと思います。

海外布教については1985年に初めて書いた『海を渡った日本宗教 移民社会の内と外』（弘文堂）にて、ハワイとかカリフォルニアで調査したことがあるんですけども、それっきり海外をやっていないので、直接、海外布教に関わるお話にはならないかもしれません。けれども、今は、国外・国内という様な分け方は、あまり意味を持たなくなっておまして、だいたいどこでも似たような問題を共有しております。特に若い世代の意識とか行動を見ておきますと、大変に似通っている。そこで、現在起こっている非常に大きな問題、文化の地殻変動みたいなものを感じておるんですけども。そうしたことをお話ししたいと思います。

### はじめに——社会の変化の反映という発想

最近の私の大学での経験から話を始めたいと思います。それは、学生のレポートの書き方というのが急速に変わってきたということです。変わってきたというより、要するに書かなくなったというのが正しい言い方だと思うんですが、インターネットで、自分のテーマの検索を入れて、検索にヒットしたデータをダウンロードして、それを貼り付けて、レポートと称して出すという学生が非常に増えております。甚だしいのは、3～4行くらい書いてだけでレポートだと言って持ってくるのもいて、哑然とする

先生もいるんです。國學院大學だけではなくて、他の大学の先生に聞いても似たような状況があるようで、ここ1～2年格段と増えたと感じております。そして、卒論などでも「参考文献は？」って聞くと、「サイトに載っていた」って言うんです。要は、サイトに載っていた本の名前をダウンロードしてただけで、読んでたわけではない。だから、ちょっと突っ込むとしどろもどろになりますので、そこから説教が始まるというわけです（笑）。しかし、これは単に学生が不真面目になったとかいい加減になったということではなく、背景には情報環境の大きな変化があります。「サイトから引用するのは悪い」という意識は全くなく、むしろその方が正確な情報が早く手に入るという感覚もあるんです。今の若い世代では知識を得ようとするとき、本や人に聞いたりせず、その道の専門家の所へも行かずに、まずはネットで見ると。

これは全てに影響し、宗教も含まれますので、影響を検討しなければ対応方法が分からなくなります。伝統仏教の宗派は今まで、近代化がもたらすものを十分に掴めなかった。近代化の中で起きた産業化・核家族化・人権・女性など、様々な問題への対応が不十分であった。しかも、そこにさらに情報化という次の波がやってきている。情報環境の変化は、人間の考え方とか、色々な情報を集めて、それをディスクローズしていく形態などを変えるわけです。宗教は情報産業という側面を持ちます。情報産業という言葉方をされると「違う」と思われる方もいるかもしれませんが、宗教の初期の頃を考えたとしても、お釈迦様でもイエスでも、彼らは物を売るわけではないですね。「こうしたら良い」とか、「こうすれば救われる」「これが正しい道だ」など、人が生きていく上で、指針となる情報を発することによって、人を動かしますから、譬喩として情報産業という表現を用いるのは適切だと思っております。そうした本質的な性質を持っているならば、情報環境が変わるのは大きな問題だろうと思いますし、これを見誤ると日本の仏教は徹底的に形骸化すると思います。

日本での宗教人口は、信仰を持っている人というレベルで言いますと、2～3割という数字が出て来ます。しかし、これは他のイスラムとか考えると分かりますけど、或る教えの信仰に基づいた生活をするというレベルに落としたり、おそらく1割切るだろうと思います。日本の社会10人に1人も信仰生活をしていない。そのレベルで言うと、伝統仏教の信者全てを合わせても創価学会の





信者に満たないだろうというのが私の推測です。檀家を仏教徒だと見るなら、葬儀は9割以上が仏式ですから、日本社会はその意味では、紛れもなく仏教国です。しかし、行動原理としての信仰という意味では、非常に小さい。情報化社会では「みんな葬式に来るからいいや」という話では、大きなマイナスの影響を受けるでしょう。

「ハイパー化」(註1)という本日のキーワードですが、これは情報化社会がもたらす、一つの人間の行動形態を示しております。何かをしたり考えたりするあり方が変わったと。今までの本の読み方は「読書百遍。意自ずから通ず」の世界です。或る人の考え方は、その人の本を全部読んで暗記して、その人が何を言いたかったかをトータルに知ることが本を読むことであり、知識を得ることであるとされましたが、今どきこういう本の読み方をする人は少ない。ちょっと調べたいことや関心があることをネットから拾ってくるわけです。そうした情報の集め方を行動原理にすることに抵抗が無くなってきています。すると、伝統的なもの、古くからあるものが共有されなくなる傾向は止めようがありません。情報環境の変化は、我々の全ての政治活動・経済活動・科学技術の発展、全部が相互に影響し合っていることから「宗教的理念からいって、相応しくない」という意見の影響なんか何の痛痒も感じないという時代です。

## 1. 情報化の社会生活への影響

情報化の社会への影響について、今のような変化の緩やかなスタートは四半世紀前だろうと思っております。日本の高度成長期が終わって、豊かな社会と言われるようになった中で、人々の意識も変わってきた70年代後半～80年代が社会の転換点であったと、多くの方が指摘しています。そして、それが目に見える形で変化してきたのが90年代後半。皆さんもインターネットや携帯電話が出て来たことの影響を感じると思います。これは従来のマスメディアの発展とは質が違ふと感ずます。特に90年代半ばのWindows95は決定的だったと思ひますね。単に見るだけではなくて、発信する側としてのメディアの位置をネットは獲得しましたし、今では小学校でホームページの作り方を習った小学生までも楽しんでゐます。彼らが、5～10年後成人しますが、その影響はよほどの想像力がないと推測できないでしょう。私は、どこの宗教界の方にも言っているのですが「情報化というのはハッキリと知の逆転構造をもたらした」と。要するに、これは学校でも会社でも、おそらく宗教界でも起きていると思うのです。少し前の社会の構造を考えた場合、組織の一番重要な情報は幹部ではないと知り得なくて、下は断片的に聞くといい構造を持つ組織が珍しくなかったと思ひます。しかし、今の情報環境というのは、それに大きな風穴を開けて、トップが知らないことを下が知っ



ているということが大いにあり得る。先生よりも、学生の方がモノを知っているということもあります。これは宗教界も同様です。情報環境が変わって、使いこなせる人は情報をあつという間に流しますから、誰かが流しますと、使える人はみんな知っているが使えない人は知らずにいると。これが「知の逆転構造」につながるわけです。それを可能にしたのは教育がユニバーサル・アクセス型(註2)の段階にいたったからということがあげられます。みんな、そこそこの教育環境にあるので、大学の先生、宗教家がエリートだ知識人だインテリだと表現することは全く相応しくない時代になってきました。何かあることに詳しいという程度に過ぎないぐらいになっています。(以下、次号)

(註1) ハイパー化された宗教とはハイパー・トラディショナルな宗教運動のことです。この「ハイパー」を用いた用語に「ハイパーテキスト」「ハイパーカード」などのインターネット時代のツールがあります。ハイパーテキストは、多数のテキストを相互にリンクを張って関連させ、この間を自由に往き来できるようになったシステムのことです。

いわば、テキスト間のネットワークですが、このハイパーテキストに見る一連のハイパー特質が人間の思考法、行動パターンにもジワジワと影響を与えているのではないかという発想に基づく概念がハイパー宗教です(井上順孝『若者と現代宗教』ちくま新書、井上順孝編『現代宗教事典』弘文堂、など参照)。

(註2) マーチン・トロウの「エリート／マス／ユニバーサル・アクセス」を参照。高等教育在学率が同年齢層の15%を超えるとエリート型からマス型へ移行。マス型へ移行すると、高等教育の構造・機能に大きな変化が生じ、それが契機となって、同年齢層人口の50%以上が何らかの高等教育機関に修学する「ユニバーサル・アクセス」型に発展。

## オーストラリア禅宗事情

山形県 宝泉寺住職 南米布教総監 采川道昭

オーストラリア人の親しい友人が出来たことを機に昨年8月に、彼の地で坐禅会を開くことにしました。本山勤務中ということもあって、長期休暇がいただける状況ではないので、坐禅会と言っても一箇所数日単位のものではなく、一日単位のを数箇所で行なうことにしたものです。初めてのオーストラリアということもあって、一箇所で何日も過ごすことよりも一箇所に最小限度の時間を費やし、出来るだけ多くの坐禅グループを訪問することにしました。目論見としては、その第一回の経験を生かして毎年彼の地に出かけて、各グループと親しく交流し、自分に手伝えることがあれば積極的に関わってゆこうという決意によるものでした。

そのような訳ですので、オーストラリアの禅会を熟知している訳でもなく、また各坐禅グループの様子に詳しいわけでもなく、言ってみれば、表面のみに触れてきたわけです。インターネットを開けば、小生よりも詳しく彼らの実態を知ることができるので、この紙面をお借りしての拙文は、「初めての坐禅会・イン・オーストラリア」といったものです。

さて、オーストラリアには現在のところ曹洞宗の寺院が二ヶ寺登録されています。一ヶ寺は、オーストラリア最大の都市であるシドニーより北のニュー・サウス・ウェールズ州バイロンベイの「道中庵」、住職は山端法玄師。もう一ヶ寺は南端の都市メルボルンの「直証庵」、住職は是松慧海師。慧海師は一昨年遷化された北米の国際布教師、カリフォルニア州・慈光寺知野弘文先生の下で得度を受け、北米で活動され、大本山永平寺、瑞應寺および熊本の国際禅堂聖護寺にも安居活躍されていたのでご存知の方も多いと思う。「道中庵」の山端法玄師は、現在静岡県長源寺の住職でもあるが、福井県の発心寺で修行され、佛国寺の原田湛玄老師の法嗣である。今回は日程的に、シドニーと首都キャンベラ、それにメルボルンの禅グループの訪問で手一杯であったので道中庵を訪問することができなかったのは残念である。

今回の坐禅会に際して、上記日本人が指導者である坐禅グループ以外の既存の禅グループは、地元あるいは欧米出身の指導者のグループであるので、彼らに極力不安を与えないように気をつかった。特に指導者たちの目には、日本の本山から来て坐禅会を修行するというだけで、侵入者と映るのではないかと危惧があったので、あくまでも友好交流を主とした坐禅会であるということを確認して予定を立ててもらった。

オーストラリアの第一歩はシドニーからであったが、

坐禅会は首都キャンベラの禅グループ（C Z G）のメンバーとの交流坐禅が最初であった。キャンベラはシドニーとメルボルンの間に築いた人工の首都であるので、古い都市（古いといっても歴史自体はたかだか200年くらいであるが）の因習にとらわれず何事にも新しく挑戦する姿勢が伺える。会が始まって日が浅いため、自分たちの道場を持っておらず、ベトナム系の寺院の一室を借りての坐禅会であった。

ここで付け加えておくが、周知のごとく、オーストラリアは最初はイギリスの犯罪者を流刑にして、自分の入る石の牢獄を自分らの手で掘らせた歴史があるが、近年はをベトナム戦争のボートピープルや、世界中の難民の人たちを受け入れてきた国である。（今回の旅行をセッティングしてくれたのもヨーロッパの某国の難民の方で、国連の制度を通じてオーストラリア国民となった人である。彼女は女性仏教徒の国際会議などで活躍し、尼僧の方々に支援の手を差し伸べている人であるが、オーストラリア国民となった彼女の数奇な運命を語ればきりが無いのでここでは割愛する）

ベトナム難民の人々を受け入れ、また韓国や台湾、チベット等の東洋の人々も社会の一員として受け入れることによって、平和を第一にする仏教の教えに興味を持つ人々が現れた。それによって、仏教や禅が学問的に取り上げられるようになり、さらに欧米およびチベットからの指導者の訪問を受けて、本格的な坐禅を修行するグループが組織されるようになった。

このようなオーストラリアの坐禅グループの中で、訪れたのは鎌倉の三雲禅堂の山田耕雲老師（曹洞宗系の在家禅匠）の系統のスバナ師を指導者としているグループである。公案も使用した指導がなされているようであるが、今回は只管打坐の説明をしての一炷と「従容録」第一則の提唱と質疑応答、その後ベトナム料理のレストランでの親睦会であった。

ご存知のように欧米に禅が広まる広まり方は、移民した人々の国の宗教として移住した民族とともに彼の地に根付くものと、欧米の知的レベルの高い人たちが、学問的に、あるいは修行を通して新しい（学問）分野を開くため、あるいは自己をより深めて知りたいという欲求に促がされての探求であり参究である。ここ「C Z G」のメンバーも、道場こそベトナムの民族的寺院を借りているものの、後者に属する人たちであり、組織のまとめ役のジェフ・ワード先生はキャンベラ大学の心理学の教授である。十人くらいの会の参加者も学生がほとんど



で、文系理系相い半ばしていたが、ヨーロッパからの留学生（医学部）もいた。

次にシドニーに戻ってシドニー禅センター（SZC）での坐禅会、このグループはかなり熟したグループであると言ってもよい。坐禅堂の二階に数名寝泊りできる一戸建ての町中の道場である。このほか山間部にリトリートセンターも所有している。ここも指導者のスバナ師は地方の接心に行っており不在であったが、ナンバー2のマロニー先生がお膳立てしてくれていた。そのマロニー先生は、シドニー大学の物理哲学の教授で、奥さんは日本人。最近では東京工業大学と東京電機大学に臨時のクラスを持っており、年に数回来日している。

シドニーでは、このほか各宗派の共同経営であるブディストライブラリー（仏教図書館）のホールを借り切った坐禅会を催した。これは、予めポスターを張り出して貰っておいたもので、午前と午後の二回の坐禅会である。初心者歓迎の坐禅会であり、例の如く「只管打坐」の坐禅の仕方の説明から入って一炷、提唱を挟んで一炷、（この間別室で独参を受け）質疑応答のあと茶話会で交流という次第である。午前、午後とも十人弱の参加者であったが、街角と会場の掲示板に数枚のポスターを貼っただけでこれだけの人が集まってくれたことは「成功」と言ってもよいと、少し自負した。ただ一身上の都合で、定期的に継続して行なうことができない状況になったことが残念である。

彼の地での移動はすべてレンタカーで行ったのであるが、シドニーから、カウラを経てメルボルンに向かった。カウラは第二次世界大戦の日本人捕虜が二千名？大脱走した「カウラの収容所」のあった地だ。現在近くに「日本庭園」と“呼ばれている”ものがある。と、呼ばれているとカッコつきなのは、確かに西洋の庭園とは異なり、やはり日本庭園の範疇に入るとしか言いようの無いものだが、そこにある石も木も当然ながら現地のものであり、その国の風景の中に溶け込んだものだからだ。建造した人のご苦労と功績は偲ばれるものの、“なんだか少し違う”という感じは否めない。それは、印度の人

から見たら中国の仏教は「少し違う」という感じがするだろうし、中国の人から見たら日本の禅は「少し違う」という感じがするだろうという感慨と重なって眺めたものだ。

禅の教えも無限の可能性を秘めているので自在に変化し、それぞれの国に溶け込んで、人々の暮らしと切っても切れなくなりはじめて存在意義が出てくるものである。

この存在意義を強く感じたのは、四つ目の坐禅会会場であるメルボルンの禅グループでの会を、チベット仏教の道場を借りて行い、その翌日訪れた、先に触れた松慧海師の「直証庵」を訪問したときのことである。

師は一戸建ての住宅のガレージを坐禅堂に改造し、単を据えて二十人ほどが坐禅できる道場を開いていた。メンバーには日本の僧堂に準じた配役を与えて日常生活も行わせている。迎えに来てくれたのは侍者寮の配役を貰っている女性であったが、日中は会社勤めである彼女にメンバーとしての生活について訊ねると、「およそ規律とか上下の関係にあまり拘らない文化の中で育ってきた自分たちにとっては、非常に新鮮であり、また、多くのことを学んでいる」との返事が返ってきた。直証庵は坐禅堂が狭いので初心者から古参までを、いくつかのグループに分け時間差で指導しておられるようであった。ちょうど摂心が終わったところで、次の予定の合い間をぬって訪問させて頂いた。師は、午後の予定があるというのでお供させていただくと、そこは麻薬中毒患者の更生施設であった。そこで患者の方々に坐禅を指導して更生の手助けをするというのが師の仕事であった。彼の国では麻薬患者は犯罪者ではなく、あくまで患者であるとする考えである。それで施設にも自宅から通って更生プログラムをこなしてゆく。師の坐禅は、いきなり静かに坐るのではなく、最初は体操のようにかなり激しく身体を動かし、徐々に静かに整えてゆく。身体の叫びに耳を傾けることから入ってゆくのだ。呼吸にも耳を傾け、最後にここを見つめるという深みに下りてゆく。その補助として、塀一つ隔てると街の喧騒という施設の中に、小さな小川を造り、せせらぎの音に耳を傾けるという、心憎いほど実にすばらしい演出がなされていた。

その施設の女性ディレクターも仏教徒であり師の信者であり、かつ直証庵のメンバーであった。

今回、とは言っても既に昨年のことであるが、垣間見たそれぞれの禅グループは、それぞれの問題を解決しながら社会の中で少しずつ成長しているようである。その出会いは筆舌に尽くせぬほど貴重な宝物となった。これらの文化や言葉を超えて出会いを繋げてくれる中心には、いつも坐禅があるのは、いまさらながら有り難いことだと仏祖に感謝申し上げ、帰途についたのだった。

この度の坐禅会旅行の大まかな印象は、たまたま依頼を受けた神奈川新聞の文化面にも掲載されましたことを付記いたします。

合掌



Buddhist Library at Sydney

… 海外レポート 南米発 …

## 泰平山慈恩寺と巡回法要に関わって感じるもの

フリーライター 太田 宏 人

曹洞宗では2004年8月下旬、南米ペルーにおいて「南アメリカ開教百周年行事」を開催した。一連の記念行事のうち、ペルーの首都・リマ市以北に散在する日本人墓地や日本人慰霊塔を対象とする巡回法要があった。筆者は僧侶でも宗門関係者でも、ましてや旅行会社の関係者でもなんでもないが、結果的にこれに帯同することとなった。以下、それをできる限り中立的に記録したい。

なお、筆者がなぜこの巡回法要に帯同したのか、その前提について触れる。我田引水の嫌いはあるが、これらの「暗部」がなければ、本来的に100周年そのものは成立しなかった。記録に残す必要性を認識していただければ、幸甚である。

## 日系社会の曹洞宗に対する感情

筆者は96年から延べ4年半ほど、ペルー唯一の日本語新聞『ペルー新報』に勤務していた。縁あって後に南米最古の（日本の）仏教寺院だと判明するリマ県カニエテ郡「泰平山慈恩寺」に放置されていた位牌群の調査を97年から99年まで行った（位牌のリストは2000年に完成）。慈恩寺は無住だった関係上、寺の運営その他はカニエテ日系協会およびその上部団体・ペルー日系人協会（リマ）が担当していた。

新聞社の安月給では全く生活できず、位牌の調査の傍ら、週末には慈恩寺内でカニエテ日系協会が主催する日本語教室で教え、寺に泊まった。また、ペルー日系人協会・日秘文化会館の日本語普及部でも教師をしていたので、慈恩寺についての調査は、日系社会が精神的にバックアップしていた。

ところが突然、曹洞宗ではない他宗派の一団が慈恩寺に乗り込んできた。「宗派は違って仏教は一緒」という日系人の漠然とした理解もあり、日系社会の主要なメンバーは1998年にこの宗派への全面協力を誓約してしまった。背景には次年に迫った日本人ペルー移住100周年祝典で、仏式で盛大な慰霊法要を実現させたいという事情と、これまでの曹洞宗に対する不信感があった。このような好ましくない状況に陥っていた経緯は、SZI会報25号の拙稿を参照されたい。

ただし、良識を持つ幹部や一般会員も少なくなかった。彼らの声を反映し、98年暮より『ペルー新報』紙上にて、「慈恩寺は日系社会の共有財産」というキャンペーンを展開する一方、曹洞宗教団に向けた連絡その他を調整した。その結果、2000年には宗務総長（当時）を団長とする移住100周年記念法要団がペルーを訪れ、当該他宗派による行動を牽制することになった。だが、この事で筆者は日系人協会からの一方的な嫌悪の対象となり、『ペルー新報』の辞職を余儀なくされた（新聞社の会長が当時の日系人協会の会長だった）。筆者の家族にも嫌がらせは及んだ。筆者は「寺籍は曹洞宗」とは書いたが、「慈恩寺は曹洞宗のもの」とは言わない。「日系人の共有財産」と強調した。しかし日系社会は「太田は曹洞宗の人間」と見なした。2000年、私は日本へ帰国した。

2002年、ペルー日系人協会は「いつまでたっても布教師を派遣せず、対応も不誠実な曹洞宗とは絶縁したい。ついては慈恩寺の本尊も持ち帰って欲しい」という文書を、宗務庁に送付した。その際、宗務庁側より対応策を諮問されたので、「ペルーに駐在経験のある元大使の仲裁が必要」と説き、私は

その調整に携わった。

そして、宗門の担当者と共にリマに行き、現地の代理人（弁護士）を推薦し、その弁護士を含めた交渉団が日系人協会とさまざまな問題点について協議したが、上記の大使経験者の鶴の一声で、事態はほぼ解決していた。日系人協会と筆者の間の溝は、さらに深まった。しかし、その事はともかく、慈恩寺の寺誌および歴代布教師の事蹟を明らかにする必要性は、痛感せざるを得なかった。なぜなら、それは当時のペルーでも日本でも誰も知らないことであり、結果、「慈恩寺の開山は浄土宗僧侶」という珍説がまかり通っていた。不確かな歴史が多く、混乱を生むことは、まさに歴史が証明している。

そこで筆者は独自の判断と責任で調査をはじめた。その結果、南米初の布教師である上野泰庵師は曹洞宗の僧侶であり、宗門中央からの派遣であること、上野師を継いだ歴代布教師の多くが彼の法燈に近い人物である事などが『宗報』や外務省『外交文書』、浄土宗の機関紙『浄土教報』等の文献上でも確認できた。また、歴代布教師の多くが不遇のうちに遷化されているためか、法脈が途絶えているケースが多かったのだが、さまざまな糸を手繰り寄せるうちに、宮崎奕保禅師の兄弟弟子が第三代布教師の押尾道雄師であり、禅師様から直接、押尾師の人となりや、上野師の人物像などについて拝聴できた事をはじめ、数多くの方々のご協力を得て、調査はほぼ、完了した。

これとは別に、ペルー各地の日本人墓地や日本人慰霊塔などの実地調査も行った。こちらは文献資料もなく、地方の日系社会の過疎化のため調査の難航を予想したが、信じられない程のスピードで終了した。神仏のご加護、歴代布教師や移民先亡者の導きによるものとししか考えられない。

## 100周年記念行事の準備

調査の結果、2003年が開教100周年ということが判明した。ところが、いくつかの理由から2004年に100周年記念行事が実現することになった。

布教史の考証が一応の完成を見たこと、ペルー側での受け入れ態勢（弁護士、アシスタント、禅グループとの調整）も、ある程度整備されたため2002年の暮には、曹洞宗と筆者の関係は切れていた。実際、Risk taker（責任請負人）としての筆者の存在は、もはや穏当ではなかった。

だが、2004年3月に再び宗務庁サイドから「100周年にあたって、任意参加の巡回法要団を組織したいので、同行してもらえないか」と打診されたので引き受けた。ペルー各地に散在する日本人墓地や慰霊塔を回った人間は、現時点では、すでに遷化された慈恩寺歴住尊師の外は筆者だけだったためだ。そこで旅行代理店スタッフ、宗務庁担当者、現地側アシスタントらと巡回法要について計画を練った。ただ、筆者へのギャラは宗務庁からは払えないとのこと達しで、「旅行会社のガイドとして」の参加を求められた。

ところが、100周年記念行事の2か月前になって、計画の突然の大幅な変更が宗務庁側から申し渡された。端的に言うと「任意参加のツアー」から「総長参加の公式行事」に格上げされた事が、もっとも大きな変更点であった。これは歓迎すべ





巡回法要のひとこま

き発展だが、現地側の人間感情を顧みず、宗門的論理で名利等を優先させた行事運営が、ペルーの人々の眼にどう映じただろうか。

その後、宗務庁側と感情的にもつれてしまったのは、筆者の不徳の至りであるが、100周年への参加は見合わせる事になったので、そこで全ての日本人慰霊施設へのアクセスについては、旅行会社にレクチャーした。しかし8月19日になり、ペルー時代に大恩ある旅行会社の社長から「どうしても道がわからない。(100周年記念行事)事務局からは、下見に行く経費も貰えない。曹洞宗は、『太田への経費は絶対に払わない』という。ホテルと食費だけは会社で持つから、どうしても来てくれないか?」と打診を受けた。事務局スタッフからも「混乱はあるが、とにかく来てくれ」との要請が入った(後日、別のスタッフから「呼んでいない。必要ない。曹洞宗はお前を既に切っている。今すぐ帰れ」と言われる羽目になる)。そこで自費で航空券を買い、リマでの滞在費もすべて自費負担で出発した。

これが、出発前までの出来事だった。

## 巡回法要の概要

巡回法要は、8月28日の日秘文化会館(リマ市)における物故者慰霊法要に先立ち、24日から27日まで行われた。その概要は、

●24日【慰霊法要】チャンカイ谷日本人墓地、ワチョー市営墓地内日本人慰霊碑、サン・ニコラス日本人墓地、パラモンガ日本人墓地。【宿泊】バラナカ市

●25日【慰霊法要】ヴィンソス耕地内日本人慰霊塔。

【宿泊】チクラヨ市

●26日【慰霊法要】トゥマン耕地内日本人慰霊塔、トルヒーヨ市営ミラ・フローレス墓地内日本人慰霊塔。

【宿泊】トルヒーヨ市

●27日【空路、リマへ帰着】

参加者：＜2号車＞宗務総長、宗議会議員ら公務のグループ計5名＋ガイド1名＋運転手1名。＜1号車＞一般参加のグループ6名(うち僧侶3名)＋筆者＋運転手1名。

24～26日まではチャーターバスを借り切ったとはいえ、パンアメリカン・ハイウェーをひたすら北上する道のりで、高齢の参加者には過酷だった。また、当初の「慰霊法要」は、一般参加者による小規模グループの予定だったため、各地の日系人協会との会食・交流会や、希望する日系家庭での追善法要、ルート上の観光地訪問が組み合わさっていた。各地の日系人

と膝を交える機会がすべて中止となったので、日系人は「残念」と言っていた。これらの慰霊施設には、僧侶の読経は半世紀ぶりという所もあり、予想以上に参列者が集まった。

なお、巡回法要のルートを事務局が正式に決定したのは、法要出発の数日前であったと記憶する。一般参加者は「出発までどこに行くかわからない」ミステリー・ツアーとなっていた。差定も決まっていなかった。

## 双方に感銘を与える素晴らしい法要

フタを開けてみると、さまざまなアクシデントはあったものの、「やってよかった」と思える、すばらしい4日間であった。亡き人々を慰霊する喜び、高僧を招請できる喜び、日系人の辛苦の歴史に共感できる喜び、未知の土地を踏みしめる喜び…、いろいろな喜びを感じてくださる方が多かったようである。

若干、筆者および旅行社のミスもあったが、ペルーのようなすべてが流動的な国で、しかも今回のように足元から揺らいだ態勢の団体旅行が、恙なく完了したことは、幸いだった。実際、帰路の航空路線は、航空会社と国との紛争によって、この巡回慰霊法要の前後は、機能停止だった。一番恐れていた盗難や交通警官による強請(ゆすり)に一回も遭わなかったのは、運がよかったとしか言いようがない。三食を欠かさず食べられ、寝るところもあった。これに勝つことができるのだろうか。

一般参加のグループの大半が高齢者であったにもかかわらず、そのバイタリティーには驚かされるばかりであった。移動する車内、彼・彼女らはほとんどしゃべり続けていた。参加者のある婦人が「これだけの長時間、お坊様のお話が聞けるなんて、めったにない機会」と述べていたことが印象的である。また、彼・彼女らは慰霊塔での清掃や、現地日系人への語りかけも積極的に行っておられた。その姿には、ただただ敬服するばかりであった。さらに公務参加者の中には、旅程中にご母堂逝去の訃報に接した方もいる。にもかかわらず、旅を全うされるばかりか周囲への気遣いまで忘れない人柄は、周囲に深い感銘を与えていたようだ。3日目の夕食時には、感想会・反省会のようなものが開かれたが、多くの人が涙を流し、巡回法要参加への感動を述べておられた。

この慰霊法要に帯同して気付いたのは、慰霊の旅は、死者やその縁故の生者のみならず、参加当事者(宗教者、一般者)にもただならぬ感銘を与えるということである。

ペルーには今回訪れた場所以外にも、複数の慰霊塔や、ジャングル地帯に忘れ去られた位牌堂、日本人埋葬地があり、これらは今まさに消失の危機に瀕している。各地にて風砂に埋もれるを待つ同胞の慰霊塔。大所高所の見地から、継続的に僧侶がこれら聖地を訪れんことを希望してやまない。人馴習するところ深く慎まざるべけんや、である。

otadejp@ybb.ne.jp

— SZI事務局脚注 —

南アメリカ開教百周年行事について、ペルーの事情と歴史を、行事の経緯を知る第一人者の立場から率直な原稿を、ということで寄稿いただきました。このような記事・記録は貴重であり、今後の曹洞宗と南米ペルー社会との関係をどう築いていくかを考える礎になると思います。消滅しつつある位牌、日本人墓地、慰霊塔、そして何よりもペルーの寺院に対して、私たち曹洞宗がどう関わっていけるかが問われている時期ではないでしょうか。

… 海外レポート ハワイ発 …

## モロカイ島カラウパパ半島訪問記（Ⅰ）

S Z I 事務局員 太田 賢 孝

## ■ なぜ「カラウパパ半島」なのか？

ハンセン病は、弱い感染力にも拘わらず、歴史的世界的にみると、医療水準や栄養事情の悪い時代と場所で猛威を奮った伝染病の一つです。ハンセン病の「病」としての問題は、今日の日本の医療技術によれば怖いものではありません。しかし人権的な視点からは、今なお、ハンセン病は未解決な問題です。最近では、国立ハンセン病療養所・菊池恵楓園（熊本県菊池郡合志町）の入所者に対する宿泊拒否事件（2003年）と、その後の誹謗事件などが記憶に新しい所です。

このハンセン病は19～20世紀のハワイでも流行していました。積極的な治療を施せなかった当時のハワイ王朝は、患者をモロカイ島の断崖絶壁下に広がるカラウパパ半島に送り、社会的に排除・抹殺する強制隔離政策をとることで、ハンセン病を克服しようとしたのです。

ある記録は、カラウパパ半島沖合まで船で送られた患者が、海に投げ出されていたことを伝えています。大勢の患者をのせた大型船は、半島に着岸出来なかったのです。投げ出された患者は岸まで泳がざるを得ませんでした。ハンセン病の影響で肢体不自由な患者が多く、彼らのほとんどが溺死しました。何とか瀕死の状態でも命からがら半島に泳ぎ着いても、そこは安らぎの地ではありませんでした。

半島南側に聳え立つ断崖絶壁が日照時間を短くし、海からの絶え間ない風は崖を上昇して雨雲を起こします。地理的にも社会的にも閉鎖された空間で、雨風の厳しい住環境。ハワイ王朝が目論んでいた半島内での自給自足の生活は、過酷な気候と水はけの良いすぎる土地柄のもとで、早々に破綻しました。耕作に使うはずの種苗は、患者達の食料として消費されました。



カラウパパへ向かう軽飛行機の機内

その上、「治療のため」と諭されて送られてきた患者達に有効な治療が施されることもなく、完治によって家族の元に帰れることは、叶わぬ夢だったのです。一度ハンセン病と診断され強制隔離が強いられば、その強制隔離は死してなお解かれませんでした。強制隔離のまま亡くなった患者は、半島内に設けられた墓地に埋葬されたのです。

## ■ 日系人への影響

そんなハワイのハンセン病患者の中には、日本人もいました。彼らは明治時代から始まった移民事業でハワイに渡った人々とその家族たちでした。移民のほとんどは、ハワイの製糖業を中心とした各種産業を受け入れ先としていました。そして彼らは、大きな夢を託して移住したはずが、無念にも同じ時期にハワイに流行したハンセン病に罹ってしまったのです。

亡くなった患者が半島内に埋葬されるのは、日系人であってもかわりはありませんでした。今日でも確認できる45基の日系人の墓石は、今日の日本で一般的に見られる仏塔型をしています。強制隔離を背負って半島に骨を埋めた彼らも、日系人としての意識は捨てなかったのだと思われます。ただ、カラウパパ半島以外の日系人が、「出身地・家の苗字」を刻印している「家系墓」を建てていたのに対して、半島内の患者が埋葬された墓は、基本的に「出身地・個人名・命日」を刻んだ個人墓の形態をとっていました。家族や社会との絶縁を強いられた彼らの境遇を物語っています。



延々と続くモロカイ島北岸の絶壁





カラウパパ飛行場にて



半島内を巡るダミアンツアーのバス

## ■ 日本への影響

このようなハワイの出来事は、日本と無関係ではありません。

日本では、ハンセン病は遺伝病・前世の悪業による業病（天刑病）だと考えられ、誤解と偏見から様々な差別を生んできました。人々はハンセン病のことを差別的な意味を含む「らい病」と呼称し、患者を社会の枠組みから排除したのです。（注 現在、ハンセン病に罹ることはまず無く、治療法も確立しています。また「らい病」との呼称は蔑称で、使用しません。）

また、明治維新以降、日本は様々な制度を整えることで「近代国家」を目指しましたが、ハンセン病問題をどう解決するかという判断が、国家レベルで要求されました。この政策決定に大きく影響を与えたのが、ハワイ王朝のとした強制隔離政策でした。

1873年にノルウェーの医師ハンセンが、この病が極めて感染力の弱い「らい菌」によるものであることを発見し、更に治療法も開発され、ハンセン病解決に一筋の光明が見えたかと思ったのも束の間。日本の当時の医学者は、ハンセン病を恐ろしい伝染病であると見なし、これを解決する為に、患者を隔離収容するという極めて短絡的で非人道的な方法をとったのです。

## ■ アロハ！カラウパパ半島

そこでこの日本の強制隔離政策の原型となったカラウパパ半島に足を踏み入れ、見たまま、触れたまま、感じたまに強制隔離の現場を知ろうと思ったのが、今回の訪問の端緒でありました。

時は平成16年9月6日。カラウパパ半島への日帰り訪問が実現しました。今回訪問した一行は、飯島尚之師（東京宗清寺副住職・SZI事務局長＝当時・現副会長＝）、野口達朗師（東京福寿院副住職・東京都宗務所人権委員）と筆者の総勢3名でした。

半島へのアプローチは2通りです。半島付け根部分に

聳える崖の上からラバ（馬と驢馬の混合種）に乗って崖を降りる「ミューライドツアー」に参加する方法と、飛行機で半島内の飛行場に直接降りる方法です。何れにしても、アメリカ保健省の許可が必要です。今回は後者の飛行機を利用しました。

始まれば早いものです。ホノルル国際空港からモロカイエアシャトル社の軽飛行機に乗り、モロカイ島モロカイ空港での乗継を経て、カラウパパ半島の突端にあるカラウパパ飛行場に降りたつまで、1時間も掛かりませんでした。飛行機のハッチが開き、カラウパパ半島に降り立つ瞬間、月面に一步を残したアームストロング船長（！）のことが頭をよぎりました。よし！

カラウパパ飛行場で目に入るものは、一本の滑走路、待合室の小屋、そして待合室周囲に立つ広葉樹とヤシの木でした。大きな崖も遠目に見えますが、その距離感は良くわかりません。飛行機を降りて待合室に向かうと、そこでは、着いて間もない飛行機に乗って帰る人と、現地に残る人が、木陰の中で最後の交歓に時を過ごしていました。特に歓迎してくれる人も居ないようで私たちは所在なくしていましたが、一人の女性が40分後に迎えるバスが来ると教えてくれました。乗客を乗せた軽飛行機が飛び立つと現地の人も居なくなりました。

人工的な音は、一切聞こえません。取り残された気分で暖かな陽射しの中で散策をしていたら、一面に降り注ぐ陽光から、キラキラと音が聞こえてくるような感覚を覚えました。

ゴゴゴゴゴ……。暫くして、陽光の音をかき消す大きな騒音と共に、濃紺のスクールバスが近付いてきたのです——。（以下、次号に続く）

本文中の「業病」「天刑病」「らい病」等の呼称・差別的な出来事などは、歴史的事実・説明のために記述しています。これらは、ハンセン病に対する誤った認識に基づくもので、今日では一切使いません。その点を十分に踏まえて、お読み頂ければ幸いです。

## 連載 「東漸？西漸？—ヨーロッパの禅—」 第1回

## キリスト教信仰圏と禅 —ヨーロッパ伝道に思う—

山形県鶴岡市 乗慶院住職 五十嵐卓三

## ■ はじめに

澤木興道老師の薫陶に興った弟子丸泰仙師が、坐禅の道を伝える志を抱いてヨーロッパに渡ったのは昭和43年であった。もっとも、多くの著書を通して禅を欧米に紹介したのは鈴木大拙師であった。しかし実践的な《坐る禅》をヨーロッパ人に伝えたのは弟子丸泰仙師が最初の人であったといっていよい。

昭和46年2月のことである。元中外日報社の社長であった本間昭之助氏から電話を受けた。

「昭和43年からヨーロッパ人に禅を広げている弟子丸さんが、フランスの国営テレビ放送の依頼を受けて、有名な映画監督と一緒に【美しい日本のお寺】というテーマの映画を撮りに来ているが、協力して欲しい」という依頼であった。そこで、私の住職地の近辺の寺院や農家、静かな田園風景を撮影して帰られた。後に弟子丸師が話してくれたことであるが、その映画はフランスで好評を博し、やがてヨーロッパ全体に放映され、日本の寺々を取り囲む風景、静かに坐る沈黙の姿がヨーロッパ人の共感を得ることになったという。それには弟子丸師の達磨さまにも似た風貌が、大いに禅への親しみを誘ったこともあった。弟子丸師との交流の始まりである。

## ■ 弟子丸師の禅伝道

シベリヤ横断鉄道でパリに着くやいなや、弟子丸師は廢墟と化したガラン堂の倉庫に坐ったという。最初は物珍しい師の姿に好奇心の目が集まったに過ぎなかった。やがて一人二人と坐る仲間が増え、理屈抜きに《坐る沈黙》への関心が集まるようになった。総じて、キリスト教の信仰者は《祈りという沈黙の世界》を大切にしている。ヨーロッパの教会・大聖堂・修道院を訪ねると誰

でもが感じることであろう。パリという大都市から出発した弟子丸禅は、やがてスイスのアルプスという大自然に抱かれた《場》を見いだすことになる。《特別接心》と銘打ったサマー・キャンプがそれであった。私も一度ピレネー山脈のフランス側の麓の風光明媚なピアリッツでの《接心》に参加する機会に恵まれた。

都会という騒音の中に生活しながら、一時の静寂に浸る場としての禅道場、サマー Sesshinといわれる特別の禅の集い、都市生活を離れて大自然の空間に抱かれての接心、時としては遠くサワラ砂漠での坐禅、あるいはカトリック修道院・修道尼院を借り切った接心等々と、形式に拘らない自由闊達なものがあつた。弟子丸禅といわれるヨーロッパの坐禅風景である。

そして昭和54年、パリから南へ200キロ程離れた場所に『泰西曹洞第一道場禅堂尼苑』が創立されることになった。16万坪に及ぶ広大な土地の中に、ヨーロッパにおける道元禅師—瑩山禅師—沢木興道老師—弟子丸師と継承されて来た坐禅の実践と伝道の中心舞台が出現したのである。さらに昭和57年の4月には、ヨーロッパ伝道15周年の記念行事を開催することを公けにした。ところが昭和57年4月、弟子丸師はその思い半ばにして急逝なされたのである。

果たして、弟子丸師が禅道尼苑に託した願いは何であったか。

## ■ ヨーロッパ人と現今の禅道場

禅道尼苑に本拠を置いてヨーロッパ全体に禅の実践を実現しようとした、弟子丸師の念願は結論的にいうと僧伽生活の確立にあった。禅の情報誌『ZEN』（昭和56年第35号）に僧伽の生活—《La Vie dans la Sangha》—を基本においた師の青写真が描かれている。則ち、坐禅、作務（建物の造作、法衣、絡子等の製縫作業）、生産労働（畑作・果樹等）、そして学習を柱とした坐禅の実践的な信仰共同体の確立にあった。

周知のように、ヨーロッパに見られる現今の曹洞宗関係の活動状況は、四年前に創設された曹洞宗ヨーロッパ総監部に組織づけられることになった。しかし、現実的な活動となると大きく三つの流れがあるといえる。

まず、弟子丸師が創設された禅道尼苑を母体とする国際禅協会と、ヨーロッパ全体に広がっているその系列の禅道場がある。二つ目には、ドイツ、イタリア、スペインに設立された三つの禅協会、そして三つ目は曹洞宗からの派遣の形をとる日本人開教師による活動である。その中で一と二に属するグループの活動に注目する必要がある。いうまでもなく、弟子丸師の坐禅を顕揚しよう



イタリア 普傳寺



とする禅グループである。

すでに触れたように、《坐る禅》をヨーロッパに伝えたのは弟子丸泰仙師であるが、今日のヨーロッパには臨済宗の系列、チベット仏教の瞑想、そしてキリスト教的瞑想の禅グループ等々と数限りなくある。そうした中であって、曹洞宗系の禅活動の特徴は何か。

## ■ 禅協会の共通理念

ヨーロッパの曹洞宗系の禅協会—いところのAssociationは、言語的には《共同》あるいは《結び》という理念を表現している言語であるが、このことはキリスト教の信仰圏の人々にとって最も基本となるものであった。つまり、アソシエーションには教会（エクレシア＝集い・共同）と同一の意味合いを含んでいる言語でもある。

弟子丸師がヨーロッパに確立しようとした《僧伽》への理想は、キリスト者の歴史的な背景に学んだものであったに違いない。だからこそ、ヨーロッパ人にとって《僧伽》は単に修行的共同体ではなく、関心・思い（Interest）を共にする人々の集う場所として親しみを深めて行った。ドイツ禅協会の趣意文に、

「活発な共同体をつくりあげるには、すべてのものが実行し得るものであって、その情報を提供し合う・・・」とあるように、ゲマインシャフト（共同体）の確立を目指すことにあった。則ち、

「禅協会は禅の実践について関心をもっている人のために門を開き、その目的を達するように手助けをする」という基本精神によって、関心を持つすべての人々に門を開いているのである。また、フランスの国際禅協会が宣言しているように、

「僧伽は・・・国際禅協会にとって教会でもなく、日本宗派の支派でもない・・・」という独自の考え方もある。そして最後に、イタリア禅協会について見ると、

「イタリア禅協会は宗教的、哲学的な特色を持っている」

ことを基本として五つの指標を定めているが、曹洞宗寺



ドイツ 朝課

院の伝統を重んじて、その実践の場として法堂・禅堂・衆寮をいち早く建立したのであるが、その普傳寺も今年の4月24日で創立20周年を迎えている。

いづれにしても、禅に親しみを持つヨーロッパ人は、意外にも《僧伽》＝僧堂の生活リズムと修道院的な生活リズムとの相似性を感じとっているようにも思える。

## ■ 結びに—三つの課題

旧聞に属するが、昭和63年7月29日のパルマ新聞—人口35万、イタリア北部の都市—で、イタリア禅協会のサマー接心について、「フォレスト・泰天・グワレスキーの指導のもとに、各国から600人もの人たちが集まって、昨年と同様に仏教の哲学的一派である禅に、より近づこうと努めている」

と述べている。こうした世論的な見方は今も変わっていない。つまり、坐禅は宗教的な信仰行為としてではなく、東洋の哲学的思考であり、一種の文化的活動であるともいう。

次に考えられることは、ヨーロッパ人の信仰の基層は、すべてがキリスト教の《神の御名の許に》にある。一例に過ぎないが、フランスのある道場の友が急死した時、友は教会の墓地に埋葬された。駒澤大學名誉教授佐々木宏幹先生が指摘されているように、宗教行為における表層—教理的理解あるいは信仰的・文化的な行動—と基層—死に対する信仰的な対応—との整合性はどのようにあるのか。

さらにもう一つ。弟子丸師の薫陶を受けた中心人物（7人）の幾人かは、現在、各禅協会を主催している。かつて三十代前後であった彼等も、いま最も活動的な年齢に達し、禅協会の明日に目を向けは始めている。そして彼等の指導を受けている人たちの考え方は如何に・・・ということである。

則ち、曹洞宗という組織の立場と、各国現地の状況との間に何が展開されて行くのか。明日への課題として留意して行きたい。



フランス ボルドーの禅道場

## S Z I 通信

## 各国際布教総監との懇親会報告

SZI事務局 館盛寛行（神奈川県梅宗寺内）

各国際布教総監との懇親会が2005年1月23日、東京竹芝を会場として行われました。出席者は以下の14名です。

## ◆出席者

|             |         |
|-------------|---------|
| 北アメリカ国際布教総監 | 秋葉 玄吾 師 |
| 南アメリカ国際布教総監 | 三好 晃一 師 |
| ヨーロッパ国際布教総監 | 今村 源宗 師 |
| ハワイ国際布教師    | 駒形 宗彦 師 |
| ハワイ国際布教師    | 吉田 宏得 師 |
| ヨーロッパ国際布教師  | 横山 泰賢 師 |

## ◆来賓

|                 |         |
|-----------------|---------|
| 大本山永平寺副監院兼国際部部長 | 松永 然道 師 |
| 駒澤大學学長          | 大谷 哲夫 師 |
| 宗議会議員           | 瀧澤 和夫 師 |

## ◆SZI事務局

浅井宣亮・飯島尚之・大谷有為・加藤孝正・館盛寛行

\* \* \*

近年、各地域において重要な行事が続きました。北アメリカでは桑港寺70周年慶讃法要。ハワイ・南アメリカでは開教100周年慶讃法要。そして、ヨーロッパではイタリア・ミラノに総監部の新設。それぞれの地域が節目の時期を向かえ、新たな時代に向けての抱



負が各国際布教総監より語られました。

話し合いの中で今村老師よりヨーロッパにおいて袈裟や絡子を含め正式な威儀を伝えたいが、金銭的に高額であること。また、得度式や晋山式の時、海外僧侶に授与するための法具が不足していることが述べられました。そして、「日本の各ご寺院が持っている法具を集めて寄贈していただくことはできないか」との提案がなされたところ、秋葉老師、三好老師をはじめ出席された国際布教師の方々が同じ思いであることを次々と語り始め、今村老師のご提案に賛同されました。

SZIでは今回のご提案を受け、是非実現させるため、事務局が窓口となることを決定いたしました。

皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

## 訃報：三好智子様（69歳）逝去

国際布教に尽くした人生・三好晃一老師夫人  
SZI事務局 大谷有為

ハワイ国際布教師、そして、南アメリカ国際布教総監を歴任された北海道北見市高沢寺住職・三好晃一老師夫人、三好智様が2005年2月4日に脳内出血で倒れられ、その後、手術・治療の甲斐なく、2月26日に北海道北見市内の病院で逝去されました。69歳でした。

智子様は、三好老師とともに1971年にハワイに渡られ、約30年の長きにわたり、ハワイ・カウアイ島禅宗寺を寺族として支えられました。また、2001年に三好老師が南アメリカ国際布教総監としてブラジルのサンパウロに赴任された後は、北海道の高沢寺に残り、お寺の護持に献身されておりました。

「飛び歩いて、無茶をして、無理を言って、目の離せられないこんな私の面倒をよく見てくれました。妻は、どこへ行っても地域の人に好かれ友達のできる人でした。最近では、オホーツクの人達にフラダンスを教え楽しんでいました…。」

これは、三好老師から夫人への最後の言葉です。心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。



三好老師夫妻







## SZI新役員紹介

## 会 長

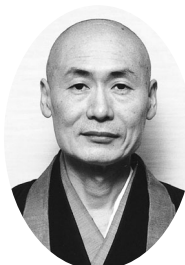
埼玉県長光寺  
住 職  
福島伸悦

設立時のあの熱き  
思いを胸に、国際  
布教の重要性をしっ  
かり認識した上で  
任を全うしてまい  
ります。

## ■ 相談役

静岡県宗徳院  
住 職  
松永然道

## ■ 相談役

山形県宝泉寺  
住 職  
采川道昭

## ■ 相談役

山形県般若寺  
住 職  
藤川享胤

## ■ 相談役

東京都東長寺  
住 職  
瀧澤和夫

## 副会長（会員増強委員長）

福島県天徳寺  
住 職  
細川正善

過般、天童山を拝  
登。古きものを凌  
駕し、近代化の波  
に飲み込まれよう  
とする中国。グロー  
バル化の下「不易  
流行」の言葉を思  
い出す。SZIは  
調和・協生を求め  
ていきたい。

## 副会長（元海外布教師連絡会委員長）

東京都祥雲寺  
住 職  
西沢応人

新役員の下、SO  
TO禅インターナ  
ショナルのさらな  
る飛躍を期待して  
います。

## 副会長（海外布教支援積立運営委員長）

東京都宗清寺  
副住職  
飯島尚之

海外寺院は、宗門  
の未来を示唆する  
「アンテナ・ショッ  
プ」。ハワイの日系  
宗教事情に関して  
はお任せ下さい。  
12年間の布教経験  
とネットワークで  
宗門に貢献させて  
頂きます。

## 副会長（情報収集特別委員長）

愛知県地蔵寺  
住 職  
浅井宣亮

海外情報の収集に  
努めると共に、会  
員の皆様に開かれ  
た組織を目指した  
いと思っております。  
海外に関する  
疑問や質問がある  
時は、気軽にお尋  
ね下さい。

## 事務局長

神奈川県泉昌院  
副住職  
亀野哲也

海外と日本をむす  
ぶ仲立ちとして、  
できることから着  
実に一歩一歩事業  
を進めて行きたい  
と思います。どう  
ぞご期待ください。

## 会 計

東京都長泰寺  
副住職  
大谷有為

グローバルゼーシ  
ョン時代においても、  
真の国際化・地球  
規模化とは何かと  
いうことを常に模  
索し、さらなる行  
動を重ねていき  
たいと思います。ご  
支援よろしくお願  
い致します。

## 監 事

静岡県永明寺  
住 職  
加藤孝正

「法は人なり！」  
で 宗門の教線拡大  
は成立ってきた。  
海外での教化活動  
の原点もそこにあ  
る。  
宗門の海外展開は  
個人的つながり  
で成立し、SZIは  
その個人的つなが  
りの集合体。

## 監 事

新潟県興源寺  
副住職  
田宮隆児

昨夏ハワイから帰  
国しました。一人  
でも多くの方に国  
際布教への理解を  
深めていただくた  
め、何かのお役に  
たてれば幸いです。

## 事務局員

神奈川県梅宗寺  
副住職  
館盛寛行

多くの方々との出  
会いの中で共に語  
り合い、共に汗を  
流すことによって  
初めて見えてくる  
ものがあります。  
この仏縁を大切に  
し、そして、さら  
に広げていきたい  
と願っています。



事務局員

東京都大龍寺  
副住職  
太田賢孝



S Z I は「学び」を身近にします。国際布教支援も勿論ですが、自らが「何か」を得る機会に溢れています。今後も、より一層多くの方がこのチャンスに巡り会えればと思います。

事務局員

宮城県城國寺  
副住職  
菅原研洲



多様化する世界に於いて、曹洞宗がどのように活動できるのか？などの問題意識を持って、さまざまな調査・研究活動などで精進いたします。よろしく願いいたします。

事務局員

神奈川県善光寺  
住 職  
黒田博志



この度、事務局員を勤めさせて頂くことになりました善光寺の黒田博志と申します。微力ながら精一杯、出来る限りのことをさせていただきます。何卒宜しくお願い申し上げます。

事務局員

神奈川県東泉寺  
徒 弟  
関水博道



今期の新役員の中で一番の若輩ですが、日々研鑽し、少しでもお役に立てよう、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

事務局員

神奈川県正翁寺  
副住職  
篁 保雄



今期より事務局員を務めさせて頂くこととなりました。微力ながらも、少しでも皆様のお役に立てればいいなあと思っております。今後ともよろしく願い申し上げます。

事務局員

京都府宗仙寺  
寺 族  
細川浩代



突然役員のご指名をいただきとても不安ですが、諸先生方のお役に立てるように頑張りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

（ 法具を贈ろう。仏法を伝える為に出来ること。 ）

使われていない法衣や法具（袈裟、絡子、笏、払子、数珠など）を海外僧侶のためにご寄贈下さい。

「威儀即仏法」を説く曹洞宗の仏法は、正式な法衣・法具と共に師匠から弟子へと伝えられています。また、国際布教師の努力によって、海外の檀信徒・僧侶にも仏法は伝えられています。しかし正式な法衣・法具は、海外で得度する僧侶の増加に伴い、不足が目立ってきました。曹洞宗の仏法を海外僧侶に正しく伝えるため、各ご寺院で使われていない法衣・法具がありましたら、是非とも、ご寄贈いただきたくお願いいたします。

連絡先：S Z I 事務局 貞昌院（亀野）

〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 TEL 070-5551-8852

S Z I ホームページ運営中！

S Z I では、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。お陰様で日本も含めて世界各国の方々にご覧頂いており、好評もいただいております。

今後より一層、情報の共有と交流の促進のために、これまでのホームページとBBS（掲示板）に加えて、新しく、S Z I のブログサイトも開設致しました。

<http://www.soto-zen.net/>

<http://www.soto-zen.net/blog/>

ご意見・ご質問等、スタッフ一同お持ち申し上げます。

2005年

## S Z I 両大本山ワークショップのご案内

演 題 「わたしはアメリカで坐禅をどう語ったか」  
講 師 米国 パイオニアヴァレー禅堂 前堂頭 藤田一照師

2005年S Z I 両大本山ワークショップは下記の日程で開催されます。總持寺におけるワークショップはどなたでも聴講できますので、是非ご参加下さい。海外での布教現状を知って頂き、相互の布教活動の活性化に貢献できればと思います。

日 時 6月27日（月）午後6時50分～  
会 場 大本山永平寺（本講のため、修行僧のみです）

日 時 6月28日（火）午後2時30分～（晚課終了後）  
会 場 大本山總持寺三松閣大講堂（どなたでも参加できます）

会 費 無 料

参加希望者は「住所・氏名・電話番号」をご記入の上、ハガキ又はFAXでお申し込み下さい。

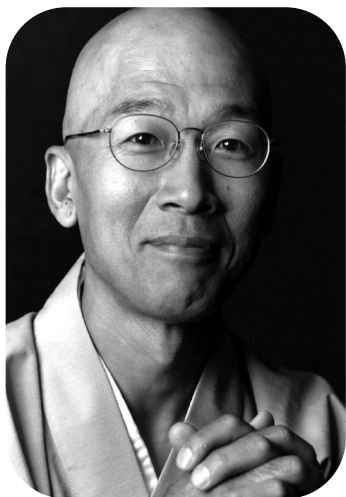
申込先

〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内  
SOTO禅インターナショナル事務局  
FAX 045-843-8864

### S Z I から皆様への御提案

藤田一照師は、18年に渡る米国での国際布教師を辞任され、この3月に帰国されました。最新の米国禅事情を知る良い機会ですので、皆様の教区・青年会・地域等の勉強会に講師としてお迎え頂くのはいかがでしょうか。詳細は、S Z I 事務局までお問い合わせ下さい。

### 藤 田 一 照 師 略 歴



1954年愛媛県新居浜市生まれ。東京大学大学院にて発達心理学を専攻。在学中、東洋医学の師より坐禅を勧められ鎌倉市円覚寺居士林の学生摂心にて坐禅を初体験する。以後、坐禅を専一に行じたいという思いが募り、28歳で学校を中退。参禅していた臨済宗の老師の勧めで兵庫県浜坂町の曹洞宗安泰寺に入山。翌年、渡辺耕法師の下で得度し修行生活を送る。博多の明光寺専門僧堂に一年安居の後1987年師の指示により米国マサチューセッツ州西部にあるパイオニアヴァレー禅堂に修行の場を移す。ヴァレー禅堂のほかに大学や他の仏教センターでも坐禅指導や講演を行う。本年3月末に約18年の米国での生活に終止符を打ち、家族とともに帰国、三浦半島葉山町に住み始める。著作に『アメリカ禅堂通信』『ヴァレー禅堂雑想録』『私の坐禅参究帳』（いずれも『大法輪』連載）など。共著に『新こころのシルクロード』（佐賀新聞社）。訳書に『禅への鍵』（春秋社）、『ダルマの実践』『フィーリング・ブッダ』（以上、四季社）がある。